

十三、行者堂の一夜

J R山手駅から北に入った山あいの一の滝の霊場があります、そのさらに奥に神代の滝という霊場があることを知る人は、あまりいないでしょう。これは明治の頃に、古い霊跡をもとに開かれたものなのですが、一時はすっかりさびれて、その頃、谷川に薄暗くおおいかぶさった樹木の下を行くと、なま白い弁財天やまつ黒な不動明王などが次々に現れて、まるで冥府めぐりのような不気味さでした。最近は手入れがなされて、また復活しようとしているようです。

さて、この霊場がもう滅びようとしていた昭和四十年の九月、たえだえな道を登ってきて、この行者堂でひとりの女性が夜を明かしたことがあります。当時有名な劇作家の秋元松代さんです。

彼女はこの年、RKBから芸術祭参加のためのびました。『かさぶた式部考』は歴史民俗資料室に展示されています。

ちなみに、博多座の二〇〇五年の一月公演で、蜷川幸雄演出による「新近松心中物語」が上演されて好評を博しましたが、その脚本は秋元松代さんによるものでした。

テレビドラマの脚本を依頼されたのですが、それは九州地方の伝説を題材にするという注文がついていました。この何年か前、彼女は大阪朝日放送の依頼で、東北地方の海尊伝説をもとにした「常陸坊海尊」という脚本を書いて、賞を得ていましたので、RKBは柳の下のどじょうを狙ったわけです。

秋元さんは佐賀宮崎あたりにひろがる和泉式部伝説を取り上げることにしてその方面に取材を重ねましたが、どこに行ってもなかなかイメージが結晶せずには悩みぬきました。そして、鞍手郡宮田町の古い尼寺を訪ねたりしたあげくに、ようやくこの霊場にたどりついたのです。

折よく行者堂には山伏さんの妻と娘の二人連れが滞在していて、秋元さんは彼女たちといっしょに滝に打たれ、夜明かして語りあいました。その中から次第に形を成してきたのが「かさぶた式部考」という烈しい内容のドラマです。RKBはこれを「海より深き」という名のテレビドラマに制作し、その年の芸術祭に参加しましたが、芸術祭受賞受賞となって実を結



霊場の中心、神代の滝。ここは畝原山登山ルートに当たっていますので、ときどきハイカーもおとずれます。